本興寺だより

令和五年
七　月
第二四七号

「我が一念の心不思議なる處を妙とは云うなり、不思議とは心も及ばず言葉も及ばずと云う事なり」

（宗祖　一生成佛鈔）

梅雨が明ければ炎暑が加わる季節となります。人は季節の変化は、それぞれの時期はこういうものだと納得して素直に受け入れ、それに応じた対応をします。

私達の心も、四季の変化のように、日々移り変わります。穏やかな日和の春や、心地よい爽やかさを感じる秋のような日ばかりではありません。

人の心は風鈴のように、ちょっとした風にも左右に揺れ続けています。人生の風は、時として冷たく、時として荒く吹き付け、風鈴のように爽やかではありません。

一時のすぐ解決する悩みならともかく、継続して心配や悩みを抱えて生きなければならない時もあります。よく深刻な悩みがある時は、「気持ちを切り替えて前向きに・・・」とは言いますが、それが簡単にできるくらいなら誰も苦労しません。できないから心の底で地下水のように尾を引いて悩むということなのです。

仏様は、人は自分のことに固執し過ぎると、自身の命の輝きが失われて、逆に己の力が十分発揮されないと云われます。

自分の行く末を明るく切り開いていくには、生きる己の努力と、生かされている自分の命を、両眼の如く共にしっかりと見つめていくことが大切であると。

「心配」（しんぱい）と「心配り」（こころくばり）は同じ字です。心の矢印（↓）が内側（自身）に向けば心配となり、外側（他人）に向けば心配りとなります。どんな時でも、心の矢印を外側に向けて、心配りをする気持ちを忘れないことが、自身の心配で心を蝕むのを防いでくれることに繋がるのです。

人は皆一生懸命生きています。自分の生き方を目指して頑張ることは尊く大事なことですが、この「頑張る」ということも、「頑」は「かたくなな」意味でもあります。自分の信念、考えに頑なに固まり融通の利かない生き方になり易く、それが、社会の中で、努力した割に十分認められない、こんなはずではなかったという点が出てくるということです。

心配も頑張りも、何事も心のおきどころによって諸刃の剣となるのです。

私達が一番理解しているようで、実はわかっていないのが己の心であると云われます。

気にしないでおこうと決めても余計気になってくる。心で割り切って忘れたつもりの問題が際限なく思い出されて心労がかさむという人もいます。自身の心でありながら、自分の意思のとおりにならならない心にジレンマに陥ることもあります。

自分の心の本質は何なのか？起こる一念の心を見つめれば、色も形もなく、何も実体はないのかと思えば様々に心起こる。まさに「妙」としか言いようがない不思議なものであると云われます。

その心の本性（心性）は、私達が日頃考え、思索し浮かんでは消え、生滅変化する心を超えて不生不滅であると説かれます。

人の心は、磨かない鏡がほこりで汚れてくるように、煩悩や苦悩で曇っていても、その下には、澄んだ輝く魂があるのだと云われます。それを次のような例えで示しています。

大海の水が風によって波立っても、水は風のように動くのが本性ではない。風が止めば水の動きもなくなるが、水の本性たる湿性は変わらない。それと同様に、私達の心も無明（心を惑わす煩悩）の風が吹くと動き出し、迷い出すが、無明の動きが止まれば、その心は消滅する。しかしその本性としての魂（仏性）は消滅することはないと。

仏様は、「人は心を大地のように広く、大空のように限りなく、大河のように深く、なめした皮のように柔らかに養わなければならない」と教えられています。

人が大きく生きるには、小さな自我に凝り固まらず、心の矢印を外に向け、心を大自然の中に大きく広げて、共に学び共生しているのが全ての本来の命であることに気付くことが大切だと説かれます。

山川草木の在り様は全て人の生き方をも教えているのだと仏様はいわれます。

当山の何万という沢山の紫陽花が今年も綺麗に咲き誇り、多くの方が見に来られました。

花を見て難しい顔をしている人は見かけません。皆穏やかな表情で花と接しています。人の心を瞬時に和ませる花のパワーはすごいと思います。

人は他人にそれほどのインパクトをまず与えられません。本来は人は他の人に、花のように安らぎと心のゆとりを与えられる生き方が大事なのでしょうね。

紫陽花はたくさんの花が共に競い合って空を見つめて、生き生きと咲いています。たくさんの花に囲まれているからこそ、それぞれの花も輝くのです。

人間も人の間と書くのは、孤独にならず、自己のエリアに閉じこもらず、他人と交わり支え合い生きることが大事だと教えています。

人間関係は大切なことですが、一方でわずらわしさを感じることもあります。

人は思い通りにいかない時、よく愚痴をこぼしたりします。仏様は愚痴を止めるには、因縁観（あらゆることは因縁によって生じること）を知り、観察してその原因を除くことだと云われます。人の一生も万象も因果、因縁の中に生命の営みがあります。

自分では気づかない行為や考えの中に、苦悩の原因が隠されていることに気付いて、運命を良い方向に転じていくことが大事だと教えています。

合掌

本興寺住職　中　谷　聰　秀